

正當に安心する

向殿 政男 Masao Mukaidono

明治大学 顧問, 名誉教授

感染症の世界的拡大

新型コロナウイルスが世界を襲っている。世界保健機構（WHO）がパンデミック（世界的大流行）を宣言した。筆者の短い（？）人生でも、これほどの感染症の世界的拡大は初めての経験である。今回の新型コロナウイルスの特徴は、まず、治療薬がないこと、そして、潜伏期間が長い上に、感染すると症状が出る前でもウイルスを回りにまき散らすサイレント感染者がいて、知らない間に感染が広がる場所があるらしい。しかも、小学生や若者は、軽症で済んで回復するが、高齢者や基礎疾患を持っている人は重症化しやすい、というのが問題らしい。これらは、テレビや新聞の報道で得た正しい知識である。一方で、怪しげな情報がネットにあふれ、これまたウイルスのようにまき散らかされている。私たちは、怪しげな情報に惑わされないで、どうすれば安心できるのか。

恐怖と不安

フロイトによれば、「私たちは正体がわかっているものに恐怖を感じ、正体がわからないものには不安を感じる」らしい。新型コロナウイ

ルスに対しては、私たちは恐怖を感じているのだろうか、それとも不安を感じているのだろうか。どうも、正体がわかっているが治療薬がないことに恐怖を感じ、知らない間に感染するのではないだろうかと不安に思っているのであろう。一方、爆発的拡大で、都市機能がマヒし、医療崩壊が起こっている他国の状況や過去の歴史的事実は、まさしく恐怖に値する。

正當にこわがる

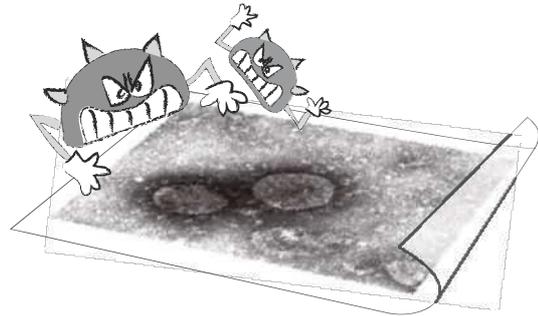
災害に関しては、寺田寅彦が言ったという有名な「正しく恐がる」という言葉がある。科学的根拠に基づいて正しく恐がることと思っ、今回、改めて調べてみた。寺田寅彦の記述は、「ものをこわがらな過ぎたり、こわがり過ぎたりするのはやさしいが、正當にこわがることはなかなかむつかしいこと」であった。「正しく恐がる」ではなく、「正當にこわがる」が正しく、しかも、重点は、正當にこわがることは「むつかしい」という点にあることを知った。

「正しく」と「正當に」の違いがどこになるかは定かではない。筆者は、「正しく」は事実やデータに基

づいて、しいて言えば「物理的に正しく」という意味であり、「正當に」は道理にかなって、強いて言えば「合理的に正しく」という意味であると解釈したい。筆者が最初に予想した科学的根拠に基づいて正しく恐がるという意味ならば、確かに「正しく恐がる」の方がよいかもしいが、もっと広く合理的に道理にかなって正しく恐がるという意味ならば、寺田寅彦が書くように「正當にこわがる」の方が妥当なような気がする。合理的に道理にかなうとは、わかる範囲内で科学的に正しく考えることに加えて、人間の価値観や社会制度なども含めて更に広く考えることと考えたい。筆者の勝手な解釈であるが、寺田寅彦は、この違いをあえて明確にしたいために「正當に恐がる」という言葉を使用したと推察している。

安全と安心

さて、「正しく恐がる」に学んで、「正しく安心する」ということを考えてみたい。「恐がる」と「安心する」との関係は、よくわからないが、モノづくりにおける「安心」は、「安全」と切り離すことができないのは明らかである。消費者に安心して製品を使用し食品を食べてもらうには、まず、製品や食品自体が安全であることが大前提のはずである。企業や国は、安全を実現するこ



とに責任がある。一方で、消費者は安心を求めている。安全と安心は、異なった概念である。安全は、できるだけ科学的に、客観的に、合理的に判断することを趣旨としているが、安心は、個人によって判断されるもので、主観的であり、経験に基づくところが大きいからである。しかし、安全もすべて科学的に決定することはできない。どこまでリスクを低減したら安全といえるかという許容可能なリスクレベルは、価値観に基づいて決められていて、安全は、価値観から離れることはできない。一般の市民は、安全がどのように実現されていて、どのレベルのリスクが存在しているかについて、詳しく知ることはできないし、その能力を要求するのは無理というものである。安全を実現している国、企業等の組織を、時には担当者である人間を信頼して、安心して製品を使用し、食品を食べているのである。この意味からは、安全と安心をつなぐのは信頼であるというのが筆者の長い間の主張である。

一般市民が、リスクに関して科学的に理解し、冷静に判断すれば、安全に関する誤解がなくなり、安心に繋がるはずである、といわれている。しかし、それは早計かもしれない。一般市民に科学的知識を啓蒙することにより、安全・安心問題が解決されるだろうという知識欠如モデ

ルには問題がある。安全に関する情報には、安全を実現している国や企業と一般市民との間に情報格差がある。一般市民全員が、科学的知識を正しくちゃんと理解するというのは非現実的である。また、たとえ、正しい科学的知識を得たとしても、安心するとは限らない。価値観は個人によって異なるからである。筆者の友人で、いまだに飛行機には乗らずに列車や車で移動する人がいる。

バイアスの存在

私たちの価値観やリスクの認識には、バイアスという厄介な現象がある。一般民衆のリスク認識は、専門家と異なり、科学的なリスクの事実から逸脱した「ゆがみ」があると捉えられているのが普通である。恐ろしいモノや未知のモノのリスクを高く認識し、身近なリスクはあまり高いと認識しないとか、低いリスクを過大評価するとか、いろいろなバイアスが指摘されている。しかし、これらは人間が持って生まれた特性なのかもしれない。また、マスメディアの報道に私たちは大きく影響される。動物と同様に、生き残るために人間は安全よりも危険に敏感であるようにできている。マスメディアは

このことを利用して、危険情報だけを大きく伝えて、安全であるという情報はほとんど伝えることがない。危険情報にはニュースバリューがあり、これを取り上げることによって販売数や視聴率を上げるというビジネス上の配慮が働くのは仕方がないことであろう。マスメディアというものは、そういうものだと思っておく必要がありそうである。

正に安心する

リスクについて、科学的に、冷静に判断することは重要であるが、私たちの認識にはバイアスが存在するということが、また、マスコミ報道には、上のような特徴があるということ等を知っていることが重要である。このような事実を知った上で、私たちは「正しく安心する」必要がある。こう考えると、「正しく安心する」よりは、寺田寅彦に習い、「正に安心する」という方が、それこそ正當かもしれない。

参考文献

寺田寅彦、小爆発二件、「寺田寅彦随筆集第五巻」岩波文庫、岩波書店